

さようならの灯り

幼い日に母がしてくれたように
別れを繰り返す度小さくなる母の手を包む

また帰っておくれ……
声にならない後の言葉は白い息に変わった
車のエンジンがかかった時急に窓越しから
今まで羽織っていたシヨールを私の肩に掛けた

シヨールに顔を埋めるとほんのり温かく
母と過した時間が胸の奥に過ぎった

昨夜遅くに帰った私に夜食を用意し
食べ終わるまで横に坐っていてくれた
一泊しか出来ない里帰りは慌ただしく
何時も母を忙しくさせる事になった

自分の事もままならない程老いたのに
幾日かけてまとめた土産だろう

手作り味噌に漬物
今は作れなくなった米まで……

車が走り出すと母は懐中電灯を振った
高台の生家は灯りが遠くなるまで見える
私も車の窓から懐中電灯を振り返した

樹樹を透けて左右に揺れる灯り
きつとだよ きつと……

月に一度の帰りを一途に待つ
母の声となつてこの耳にとどいた

母の為の里帰りと思っていたのは勘違い
私が帰らせて貰っていたのだと
気付いたのはずつと後だった